

がん患者の診療期における判断と 意思決定を支援する看護実践上の指針 — 外科病棟における 自己の看護実践の分析より —

椎葉 幸子 (応用看護学)

【キーワード】 がん患者・診療期・判断・意思決定・
実践上の指針

本研究の目的は、がん患者の診療期における判断と意思決定を支援する看護実践上の指針を明らかにすることである。

研究対象は、がん患者の診療期における判断や意思決定への支援ができたと思われる自己の看護場面7事例7看護場面である。

研究方法は、看護場面をプロセスレコードに再構成し、各看護場面の意味を取り出した。そこから「患者の状況とその変化」と「看護者の認識と言動の特徴」を抽出し、場面ごとに「看護のポイント」を導き出した。さらに全事例の共通性・相違性を検討し、診療期に沿って「判断や意思決定の困難な状況」と「判断と意思決定を支援する看護実践上の指針」を以下のように取り出した。

<がん告知後>

1. 患者の病気に対する思いや感情が表出されない時は、患者の身近なことに関心を寄せ、日常的な会話の中から、患者の思いが表出されるよう関わる。
2. 患者の思いが表出されてきたら、患者の位置に立って患者の思いを共感し、表現する。また、患者が表現しきれない思いを代弁したりすることでさらに思いが表出されるよう支援する。

他、「治療や治療場所の選択で葛藤が生じた状況」に関わる1指針

<治療期>

1. 主治医から病状や経過について説明を受けても説明の意味を理解できない時は、

- (1) 患者が体験している具体的な事実を活用しながら患者がイメージできるよう説明する。
 - (2) 専門知識と重ねながらわかりやすく医師の説明の根拠を補足する。
2. 自分自身の身体に起こっている現象を理解することができずに不安を訴える時は、患者の不安な思いを受け止め、共感しつつ、表現の奥にある感情に目を向け、根本問題を捉えると共に、患者が自分の身体に起こっている現象を理解し、患者が自分で判断し問題解決できるよう関わる。

他、「副作用に対する不安やマイナスのイメージから消耗をきたしている状況」に関わる1指針

<ターミナル期>

1. 患者と家族の思いや考えにズレが生じていると判断した時は、
 - (1) 患者が家族から病状を理解してもらえないと訴えた場合、日々の病棟での家族の様子から判断した看護者が感じる家族の思いを、患者・家族の立場を慮りつつ事実を示しながら伝える。
 - (2) 治療場所の選択において意向が違う場合、家族と面談し、患者の思いを伝えるとともに、家族の考えを確認する。家族の面会状況や主治医と患者家族の関係、家族が力を発揮できる環境を考慮し、治療場所の選択について判断し、看護者の考えを伝える。
 2. 治療方針について患者と家族、家族と主治医で思いや考えのズレから、家族関係に問題が生じた時は、患者・家族それぞれの思いを伝えて、患者・家族の関係が修復できるように橋渡しをする。
- 他、「症状が完治しない状態で主治医から退院を促され困惑している状況」に関わる2指針